

美術教育史研究部会

戦後日本美術教育史研究の視座を探る(2)

Exploring the Perspectives of Research

on the History of Post-War Art Education in Japan (2)

赤木 里香子

AKAGI Rikako

岡山大学

OKAYAMA University

1. はじめに

本研究部会では、昨年の東京大会に引き続き、近年著しく進展しつつある戦後日本美術教育史研究をテーマに話題提供と資料紹介を行い、参加者同士の情報交換やディスカッションを通して、戦前・戦中と戦後との連続性ないし断絶を捉え直し、1950年代までの美術教育をめぐる状況を探ります。お気軽にご参加ください。

2. 話題提供

・宇田秀士先生（奈良教育大学）

『新しい絵あそび』（1956）著者、沢野井信夫（1916-1990）の周辺にいた人々

—第二次世界大戦後の民間美術教育運動、出版、美術・版画・デザインの潮流にふれて—

今回の兵庫大会で「沢野井信夫(1916-1990)の『あそび』を活かした美術教育の構想と長谷川三郎(1906-1957)の一般向け美術書の関係—沢野井の師、長谷川の1950年代の著作をふまえて—」を口頭発表される宇田先生に、話題提供をお願いしています。

宇田先生の継続研究によれば、画家・デザイナーとして関西で活躍した沢野井は、戦前より洋画家赤松麟作(1878-1953)に写実的な油絵を学び新文展・日展に入選を重ねた後、1948年に自由美術家協会の展覧会に出品、抽象絵画の新たな開拓者として長谷川に高く評価されました。また、大阪大丸百貨店に勤務し出版やデザインの業務を担当した沢野井の周辺には、大阪大丸に勤務し後に銅版画家・画家となった泉茂(1922-1995)、泉の大阪市立工芸学校時代の師であり、長谷川と交流のあった画家・デザイン教育者山口正城(1903-1959)、朝日新聞大阪

本社の美術記者で後に大阪芸術大学教授となる美術評論家村松寛(1922-1988)、山本鼎(1882-1946)の従兄弟で雑誌『アトリエ』の編集に携わり、1950年に大阪市の出版社創元社に入社して沢野井の著書も編集した保坂富士夫(1910-1987)らがいました。創元社は各種の美術教育関係図書を刊行しており、沢野井『新しい絵あそび』には、創造美育協会の久保貞次郎(1909-1996)が序を寄せています。

3. 資料紹介

久保と長谷川には戦前から接点がありました。戦後の長谷川は、児童美術と現代美術への理解を求め芸術教育の改革を説く著作『図画教材研究』（法政大学通信教育部、1950年7月初版発行、1954年12月7版発行）を残しました。60頁程度のテキストですが、教師の自己改革の必要性や児童を抑圧から解放することを訴えるなど久保の主張と重なる面と、生活の中にある美やデザイン、東洋の伝統、美術鑑賞の意義を強調する独自の主張を読み取れます。

なお、久保が『みづゑ』1951年2月号の児童美術特集の冒頭でジャーナリズムが喧伝する豆天才の事例に挙げた「西田ひろし君」とは、長谷川と親しい画家西田信一の息子であることが、長谷川三郎・佐波甫「西田紘君と矢野目清彦君の個展」（『教育美術』11(3)、教育美術振興会、1950年、pp.24-25.）からわかります。この個展の作品の行方や、長谷川と吉原治良(1905-1972)との関係についても紹介します。

【謝辞】資料収集にあたり、兵庫県芦屋市にある「甲南学園 長谷川三郎記念ギャラリー」にご協力いただきました。厚く御礼申し上げます。